

自 己 評 価 表

愛媛県立小松高等学校

11

(令和6年度)

教育方針		重点目標	文武両道 情理一体 人間力を高めあい 夢の実現を — 伝統を継承し、地域とともに未来へ向かう —		
国家社会の有為な形成者として、個人の尊厳と責任を重んじ、豊かな文化の創造と国家社会に寄与する、徳・知・体の調和の取れたたくましく生きる人間を育成する。			1 誠実で礼節を重んじ、活力に富む健全な心身を養う。 2 学習意欲を高め、自ら学び自ら考える力を養う。 3 一人一人の個性を伸ばし、豊かな感性や創造力を養う。 4 多様性を尊重し、互いのよさを生かして協働する力を養う。		
領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
学習指導	家庭学習の充実	一定時間机に向かう習慣が定着するよう、各教科でICT活用など課題の工夫や個に応じた指導を行うとともに、各HR・学年で学習への意識高揚を図り、1日2時間以上の家庭学習時間を旨す。 A:2時間以上、B:1.5～2時間、C:1～1.5時間 D:0.5～1時間、E:0.5時間未満	B	調査発表期間の平日では、2時間以上学習できたのは全学年28%程度。休日は全学年70%以上に達成している。学習時間の60～120分が各学年約40%を占めている。昨年度と比べ、顕著な伸びはみられていない。	家庭学習時間確保のため、各教科で課題の出し方の工夫をする。個に応じた予習・復習の方法を指導するなど、調査発表期間以外の家庭学習時間の増加を図る。
	教科指導力の充実	教科内及び教科間の情報交換や学習評価に関する研究を継続・発展させ、ICT活用などにより主体的・対話的で深い学びとなるよう授業の満足度や学習意欲を高め、授業の改善を進める。 <u>全員がICTの活用を研究、実践し、有効活用に努める。</u>	A	生徒の授業評価アンケートの全教科平均は5点満点中4.8で高評価であった。教科会等で授業力向上への情報交換や研究に努めているは、85%であった。ICTの活用については、教職員の90%が有効活用に努めることができ、昨年よりも増加している。	教科内及び教科を横断しての情報交換や研究を継続し、満足度を更に高めたい。ICT活用の指導力向上を目指し、研修会等を通して、更に研究を進める。
		校内研究授業や相互参観授業で、年間4回以上授業を参観して、教科会や学年会などの研修も踏まえて授業力向上に努める。 A:4回以上、B:3回、C:2回 D:1回、E:0回	A	授業参観の実施回数は一人当たり4.8回であり、目標を達成することができた。初任者研修、フォローアップ研修などが、実施回数の向上に大きく影響しており、授業力の向上に努めることができた。	日頃の授業改善にも活用できるように、提出された授業参観チェックシートは、PDFファイルとして保存しているため、授業を参観した全員に提出してもらえよう、呼びかけをしていく。
	資格取得の奨励	各種検定の1級合格者延べ50人以上を目標に、個別指導等の徹底や資格取得への意識を高めることにより、上級資格取得の奨励に努める。基礎・基本、実務に役立つ2・3級の合格者を増やす。 A:50人以上、B:40～50人、C:30～40人 D:20～30人、E:20人未満	A	家庭科技術検定51名、ビジネス計算実務検定5名、ビジネス文書実務検定9名、情報処理検定1名が1級完全合格であった。部門合格者も多かったもので、もう少し指導の徹底を図ればよかったと反省している。	家庭科技術検定では、筆記試験で不合格にならないよう、基礎的な知識を含め今後も指導を継続する。 商業の検定では、Webシステムによる検定申し込みが始まったため、基本的に2か月前の申し込みとなり、日程変更もできない。放課後の部活動等、受験生に明確な目標を持って対策を行うように伝達、指導できる体制作りに努める。
生徒指導	基本的生活習慣の確立	生徒の変化の兆候を早めに把握し、個に応じたきめ細かな生活指導と家庭との連携によって、全校出席率98%以上を維持する。 A:98%以上、B:96～98%、C:94～96% D:92～94%、E:92%未満	B	全校出席率は96.4%で、98%以上の目標を達成できなかった。	1、2学期ともに欠席・遅刻等が増加している。個に応じた生活指導をきめ細かく行うとともに、長期休暇の過ごし方を含め、より高い意識を持って学校生活に取り組ませる指導が必要である。
		5分前登校指導を徹底し、遅刻ゼロの日60日以上を旨す。 A:60日以上、B:45～59日、C:30～44日 D:20～29日、E:20日未満	E	遅刻ゼロの日は20日未満となった。生徒の多様化に伴い特定の生徒で遅刻が多い状況が続いているが、ほとんどの生徒が5分前登校できている。	前年度よりも大幅に減っている。遅刻が続く生徒に対しては、遅刻の背景にある要因を考慮しながら、迅速に面談、指導を行う。担任・学年団を中心に生徒の実態に応じた指導を徹底して行う。来年度に向けて、数値目標の改善を検討する。
	生徒理解の推進	生徒一人当たり年間4回以上の面接指導を通して、生徒理解と指導に努める。 A:4回以上、B:3回、C:2回 D:1回、E:0回	B	年間3回の面接週間を行っている。学年団を中心として、担任が適時、適切に生徒に向き合い、生徒理解に努めることができた。	次年度についても、担任・学年団を中心として継続して面接指導を行う中で、より生徒との関わりを深める。更に、面接の時期、回数などについての検討をする。

※ 評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。

	環境整備への主体的な取組	環境美化への意識を高めさせ、清掃時間だけでなく、普段から校内美化に努める。地域行事にも主体的・積極的に取り組む態度を養い、奉仕の精神を育む。	B	生徒の環境美化への意識をさらに高めるため、清掃時は5分前に担当場所へ移動することや清掃後は一度集合するように呼び掛けた。藩主墓所清掃活動など地域の環境美化行事には、ボランティアとして参加してくれる有志生徒が増えてきた。	年2回のクリーンキャンペーンをはじめとし、美化委員会から全校生徒への環境美化を呼び掛ける。また、美化委員の校内放送での発信が興味深い内容となるように工夫する。更に、奉仕の精神で活動できる生徒を増やすことで、ボランティアスピリットを育む。
	ルール厳守とマナー向上	交通安全指導において、ヘルメットの着用をはじめ、命の大切さについての指導を行う。交通ルールを遵守し、マナーを向上する態度を育成し、交通事故ゼロを達成する。	B	登下校中、休日中の大きな交通事故はなかった。ヘルメットの着用率は向上しているが通学時だけでなく普段の生活中でのヘルメットの着用、「ながらスマホ」の危険性など指導を続けたい。	ヘルメット着用が義務化となり着用意識は向上しているが、開校日の登下校に限らず、休日中もヘルメットの着用を促し、命の大切さについての指導を継続して粘り強く行うとともに、地域と連携して巡視回数を増やす等の対応を継続していく。
進路指導	個に応じた進路保障	学年団と進路課が連携をとりながら、1年次から進路意識を高める指導を継続的にを行い、充実した家庭学習に努めさせる。多様な入試（小論文、集団討論、プレゼンテーション等）に対応した力を育成することで、 <u>進路満足度100%</u> を目指す。 A:100%、B:90～100%、C:80～90% D:70～80%、E:70%未満	B	新教育課程完成年度の3年生は、昨年までと異なり指導が困難な部分もあったが、それぞれの目標達成に向けて努力させることができた。 進路満足度は95.0%で、過去5年間で2番目に満足度が高い。4月の時点で志望していた進路先に決まった生徒が64.4%(過去5年間で2番目に多い)であり、新教育課程における進路希望別のコース選択が影響していると考えられる。	今年度の反省をもとに、新教育課程に応じた指導を継続して行う。
	進路指導力の向上	学校説明会等に参加するなど、入試改革や学部・学科変更等の情報収集を行い、校内のネットワークシステムや教科会、学年会等を通して全体で共有する。	A	3学年団を中心に、大学・専門学校等の説明会に参加したり、来校して面談させていただいた学校の情報を、随時先生方に伝えたりすることができた。	3学年団以外の先生方にも説明会実施を紹介し、積極的に参加してもらえるように勤めていく。
	キャリア教育の推進	語先後礼を徹底し、インターンシップの事前指導や取組、デジタルサイネージの活用等を通じ、生徒が自ら考え、行動する力を育む。 <u>2年次からのコース選択に合わせて、それぞれの長を生かせる指導を行う。</u>	B	2月の普通科インターンシップについては昨年度までの全生徒参加の形からキャリア探究コースの生徒のみの参加とした。文理探究コースの生徒は、今年度まで3年前半で行っていた探究活動を実施し、コースの特長に応じた指導を行っている。	語先後礼については、語の日と合わせて啓発していくなど、年間を通して生徒に意識させていながら指導する。また、形式を変更した探究活動については、問題点等を吟味し、より本校生徒に適する形になるよう改良していく。
特別活動	部活動の充実	運動部各部において、計画的により充実した指導をし、3年間部活動を継続できる生徒を増やしていく。県総体出場70人以上を達成する。 A:70以上、B:55～70人、C:40～55人 D:30～40人、E:30人未満	A	年々県総体出場者数が増えてきており、今年度は県総体出場100名を達成した。しかし、戦績は振るわず、初戦敗退の部が多かった。	団体種目で合同チームの出場が認められてきており、今後の活動にも期待ができる。新小松高校へ向けて部活動の再編を進めていく中で継続して活動する意義を伝えていく。
		文化部各部において、計画的により充実した指導をし、3年間部活動を継続できる生徒を増やしていく。また、愛媛県高等学校総合文化祭等において、3つ以上の部と総計20人以上の参加を目指す。 A: <u>3つ以上の部で20人以上参加</u> B: <u>3つ以上の部で15人以上の参加</u> C: <u>2つの部で15人以上の参加</u> D:2つの部で15人未満の参加 E:D評価に届かない場合	A	愛媛県高等学校総合文化祭において3つの部で27名の参加となった。吹奏楽部が3つの部門に出場した。	文化部においては、運動部よりも途中で退部する生徒が多いように感じる。引き続き、3年間継続して活動することを推奨する。
	生徒会活動・家庭クラブ活動 委員会活動の活性化	生徒の自主的な計画・運営による生徒会活動、委員会活動、家庭クラブ活動をそれぞれ1回以上実施し、更なる内容の向上を目指す。 活動を通して、お互いのよさを尊重し生かし合って協働する力を養う。	B	生徒会活動は担当教員の指導のもと、より自主的に活動できるように改革中である。委員会活動、家庭クラブ活動については、概ね目標を達成できている。	生徒会活動において、企画立案書を活用し、より自主的に活動できるようサポートする。生徒会会則の改定に向けて検討する。委員会活動においては、月1回を目標に実施する。

※ 評価は5段階 (A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。

	自主的な奉仕活動	年間5回以上の奉仕活動、地域清掃活動を目指し、豊かな人間性の育成を目指す。生徒への各種ボランティア活動案内を広めると同時に、ボランティア体験の発表会等も行うことで、生徒全体の参加意識を高める。また、生徒全体の参加意識を高め、地域に貢献しようとする態度を養う。 A:5回以上、B:4回、C:3回 D:1~2回、E:0回	A	天候により実施できなかったものもあったが、竹林整備、古民家や墓地の清掃などの活動が有志によって行われた。恒例の行事として浸透しているものもある。	奉仕活動や地域清掃活動は豊かな人間性を育成する貴重な機会であるため、どのような活動が行われているかを取りまとめ、今後も継続的に活動できるように積極的な参加を呼び掛ける。
同 和 教 育	人権・同和問題学習の積極的推進	人権・同和教育ホームルーム活動に加え、多様化する人権課題に対する生徒・保護者への啓発活動を充実させる。現地研修会などの対外的な活動へ積極的に参加し、生徒が主体的に人権問題を解消する実践力を身に付けさせる。	B	文化祭のクッキー販売や公開授業、市民の集いの人権標語や人権ポスターの展示も本来の形で実施することができた。新メンバーが多い中、PTA広報誌「きらり」を継続することができた。	公開授業は、コロナ感染症以前の参加者数にまで回復できていない。地道な啓発活動を通して、地域の協力を得られるようにする。
広 報 ・ 地 域 協 働	地域に開かれた学校づくりの推進	「学校案内」や「ライフデザインだより」等の発行物で必要情報を伝え、ホームページでよりタイムリーな情報発信を行う。 学校行事や校外活動において、生徒の活躍の場や主体的に活動できる場面を増やし、より地域に開かれた教育活動を目指す。	B	学校ホームページの「養正が丘日記」で学校行事や校外活動を事前に紹介するように心掛けてきたが、保護者等に伝わっていないことも多かった。(例、朝の読書の時間やPTA研修旅行、竹林整備活動など)	令和7年度は、部活動紹介に、生徒がよく利用するSNSを活用する等の工夫をしていく。 これまでと同じように大切な文書は、保護者の目に留まるように文字修飾などを改善して発信する。
	地域に根ざした特色ある学校づくりの推進	PTA・同窓会や地域の諸団体と協力し、「総合的な探究の時間」や課題研究で、地域人材を活用した体験学習を実施する。 地域の「歴史、文化、教育」を知ることで、地域を誇りに思い、地域に貢献できる人材育成の研究を行い、地域に根差した教育を展開する。 SDGsの観点を踏まえた授業や地域と協働した地域貢献活動等を積極的に実施し、特色ある学校づくりに努める。	B	校内では、毎月第3土曜日に地域の魅力発信学校開放日を開催することができた。校外でも国指定登録有形文化財の住吉屋で活動を行いながら、地域との連携を図ることができた。 SDGsの観点を踏まえて年3回の竹林整備活動はもちろん、校外(丹原・賀茂川右岸・兎之山竹林)に生徒が参加する等地域貢献活動を積極的に行うことができた。	地域の歴史・文化・教育を知り、誇りに思うために、街並みウォークや史跡めぐりを行うなど地域に根差した教育活動の展開について検討する。 ソーシャルチャレンジ事業は令和7年度も実施される予定なので、年間計画に明記し、継続して実施する。
業 務 改 善	適切な勤務時間	教職員の定時退勤日の設定や部活動の休日の確保などにより、教職員の勤務時間を守る。また、ICT導入で業務の効率化・平準化を図り、時間の有効活用を推進する。 <u>原則、毎月1回以上の「ノー残業デー」を各自の勤務状況に応じて設定することで、定時退庁の呼びかけを行い、ワーク・ライフ・バランスを目指す。</u>	B	教職員テレワーク制度の積極的な活用をメッセージや掲示板等で呼びかけた結果、5名(夏季休業中)から9名(冬季休業中)と利用者が大幅に増加した。また、長期休業中や定期考査期間などに「ノー残業」する教職員が増えたことで、昨年度と比較すると、勤務時間の平均値が16分の短縮、超過時間が4分の短縮となった。	今後も、一層のテレワークの活用を勧め、時間の有効活用を図るとともに、令和7年度から開始される「早出・遅出勤務制度」の利用も促し、さらなるワークライフバランスの向上を目指す。
	職場環境の整備	健康講座や健康相談を定期的に実施したり、休憩場所の環境改善を行ったりすることで、教職員の疲労や心理的負担の軽減を図る。 月1回の衛生委員会において、教職員の健康や学校安全に関する情報共有を密に行い、教職員が、より働きやすい環境作りを目指す。	B	毎月の衛生委員会に加え、健康相談の資料の提示や学校医との健康相談、また、教頭面談や日々のコミュニケーションを通して教職員の健康状態の確認を行った。また、校内の教員研修では、アンガーマネジメント研修を行い、親睦と交流を図る機会を持つことができた。	安全で快適な職場環境づくりや教職員の心身の健康の保持促進等を図るため、健康に関する情報等を定期的に発信し、また、気軽に意見交換ができるような研修を実施することで、互いの考えを理解し、共に支え合うことができる組織を構築する。

※ 評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。